慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	外国貿易と国民経済の権衡
Sub Title	
Author	堀切, 善兵衛
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.1 (1913. 1) ,p.31- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130122-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上の經濟上及文化發展上の要求を綜合するに文明國民に於ては一日十時以上の勞働は不利益少からず。今一般に一日の最長勞働時間を十時間に減少するも國民經濟上の損失を招くことなく、却て利益を生ずるを常とすべし。其以上の短縮に至ては國民文化の程度、産業の程度及組織等に依りて定まるべきなり。

外國貿易と國民經濟の權衡

堀切善兵衛

一

外國貿易に於て輸入と輸出とは長き期間に於て相平均せざる可らずとは經濟學上の眞理にして何人も疑を容るゝの餘地あることなし、然るに世人は往々にして「長き期間に於て」の一句を忘却して直ちに輸入と輸出とは相平均せざる可らざるものゝ樣に思惟するが爲め非常に誤りたる推論を導くこと少なからず、凡そ經濟學上に於て長き期間と短き期間とに依りて同一原因が全然反對せる結果を生ずるの例は決して珍しからざることにして、例へば物價は短き期間に就きて觀察すれば現に市場に貨物を供給しつゝ有る各生産者中の最も不利なる地位に在る人の生産費卽ち最大生産費に接近せんとする傾向を有すと雖も長き期間を通じて觀察すれば新發明起り新競爭者現はれて漸次不利なる地位に在る生産者を驅逐するに至る可ければ物價は最少生産費に接近せんとする傾向を有するは誤り

なき事實なるが如し、されば輸出入が平均せざる可らずと云ふは唯長き期間の一條件存在する場合に於てのみ眞理にして其然らざる場合に於ては全く反對の現象を呈しつゝ有るものと云ふを得可し。

果して然らば長き期間とは幾千の年月を指示したるものなりや、之れ頗る困難の問題にして、何人と雖も恐らくは明確なる答を與ふること不可能なる可し、然れども特殊原因の存在する場合には輸出入超過が一方にのみ偏して數十年間繼續することと有るや疑なし、例へば十九世紀間に於ける英米兩國の輸出入關係を一覽せば輸出入權衡の偏倚は非常に長き期間に渡りて繼續するものなることを知るに難からざる可し。

左表英國の統計は Clive Day 氏 A Histry of Commerce に據る。

五箇年平均

年次	輸入 百万磅	輸出 百万磅	年次	輸入 百万磅	輸出 百万磅	年次	輸入 百万磅	輸出 百万磅
一八〇一—〇五	二八	三三	一八〇六—一〇	三〇	三七	一八四六—五〇	七二	六〇
一八一一—一五	二九	四五	一八一六—二〇	二〇	四〇	一八五〇—六四	一九三	一三八
一八二一—二五	二六	三七	一八二六—三〇	三三	三五	一八六五—七四	二九一	二三五
一八三一—三五	三六	四〇	一八三六—四〇	四七	五〇	一八七五—八四	三四四	二三四
						一八八五—九四	三五九	二三四
						一九〇〇年以後は The Statesman's Year-Book に據る		
						一九〇一	五二一	二八〇
						一九〇三	五四二	二九〇
						一九〇五	五六五	三二九
						一九〇七	六四五	四二九
						一九〇九	六二四	三七八

卽ち英國は十九世紀の初めより一八四七年代に至る迄は引き續き輸出超過を見たること明白なり、然るに同年以後今日まで七十年を通じて輸入超過を繼續しつつあること左表の如し。

（同上に據る）

年次	輸入 百万磅	輸出 百万磅	年次	輸入 百万磅	輸出 百万磅
一八四一—四五	五七	五四	一八四六—五〇	七二	六〇
一八五五—五九	一四六	一一六	一八六〇—六四	一九三	一三八
一八六五—六九	二三七	一八一	一八七〇—七四	二九一	二三五
一八七五—七九	三二〇	二〇二	一八八〇—八四	三四四	二三四
一八八五—八九	三一八	二二六	一八九〇—九四	三五九	二三四
一八九五—九九	三九三	二三八			
一九〇〇	五二三	二九一			
一九〇二	五二八	二八三			
一九〇四	五五一	三〇〇			
一九〇六	六〇七	三七九			
一九〇八	五九二	三七七			

英國が十九世紀の前半四十年間に渡りて輸出超過を繼續したるは、蓋し當時英國が蒸氣の利用最も早く之を各種生產上の動力に充用し、兼て機械の發明亦英國に

及ぶものなかりしかば、其製造工業は宇内に冠絶し列國敢て之と覇を爭ふるに足るものなかりしより、其輸出品は世界の各方面に滔々奔流せるに依るものなるは明白なり、然るに十九世紀の中葉以來獨米兩國を初め產業上に於て漸次英國の壘を摩するに至りたるものなきに非ず、加ふるに學術の進歩、機械の發明、及び其應用は世界各國の共有と化したれば英國は製造工業に於ける其獨專的地位を他國の爲めに犯さるゝに至りたるのみならず、十九世紀の前半を通じて非常なる輸出超過を繼續して此時代に蓄積取得したる其資金は合衆國を初め各殖民地の事業に向つて投下せられたるが故、英國は今や比較的少額の輸出を以て多大なる輸入を迎へ得るのみならず、運賃保險料銀行手數料等として亦莫大の金額を收得するの地位に在るが爲め、唯に過去七十年の輸入超過に對して其經濟界は微動だも感せざるのみならず、將來も亦何時まで輸入超過繼續す可きか殆んど其際涯を知る能はざる次第なり、而して今日の列强中英國と全然反對の地位に立つものは合衆國にして試に十九世紀後半に於ける其輸出入狀態を驗するに次の如し。

左表は Statistical Abstract of the United States に據る。

年次	輸入（百万弗）	輸出（百万弗）	出超（百万弗）	入超（百万弗）
一八五九	二九二	三三一	—	三八
一八六〇	三三三	三五三	—	二〇
一八六一	二一九	二八九	—	六九
一八六二	一九〇	一八九	一	—
一八六三	二〇三	二四三	—	三九
一八六四	一五八	三一六	—	一五七
一八六五	一六六	二三八	—	七二
一八六六	三四八	四三四	—	八五
一八六七	二九四	三九五	—	一〇一
一八六八	二八一	三五七	—	七五
一八六九	二八六	四一七	—	一三一
一八七〇	三九二	四三五	—	四五
一八七一	四四二	五二〇	—	七七
一八七二	四四四	六二六	—	一八二
一八七三	五二二	六四二	—	一一九
一八七四	五八六	五六七	一八	—
一八七五	五一三	五三五	—	一九
一八七六	五四〇	四六〇	七九	—
一八七七	六〇二	四五一	一五一	—
一八七八	六九四	四三七	二五七	—
一八七九	七一〇	四四五	二六四	—

一八八〇	八三五	六六七	一六七						三六
一八八一	九〇二	六四二	二五九						
一八八二	七五〇	七二三	二五						
一八八三	八二三	七二四	一〇〇						
一八八四	七四〇	六六七	七二						
一八八五	七四二	五七七	一六四						
一八八六	六七九	六三五	四四						
一八八七	七一六	六九二	二三						
一八八八	六九五	七二三							
一八八九	七四二	七四五							
一八九〇	八五七	七八九	六八	二八					
一八九一	八八四	八四四	三九						
一八九二	一、〇三〇	八二七	二〇二						
一八九三	八四七	八六六							
一八九四	八九二	六五四	二三七	一八					
一八九五	八〇七	七三一	七五						
一八九六	八八二	七七九	一〇二						
一八九七	一、〇五〇	七六四	二八六						
一八九八	一、二三一	六一六	六一五						
一八九九	一、二三七	六九七	五二五						
一九〇〇	一、三九四	八四九	五四四						
一九〇一	一、四八七	八二三	六六四						

一九〇二	一、三八一	九〇三	四七八		
一九〇三	一、四二〇	一、〇二五	三九四		
一九〇四	一、四六〇	九九一	四六九		
一九〇五	一、五一八	一、一一七	四〇一		
一九〇六	一、七四三	一、二二六	五一七		
一九〇七	一、八八〇	一、四三四	四四六		
一九〇八	一、八六〇	一、一九四	六六六		
一九〇九	一、六六三	一、三一一	三五一		

卽ち合衆國は十九世紀の前半を通じては輸出超過は割合に少なく多くは輸入超過に、終り其大勢は一八七三年に至るまで繼續したり、然るに七六年以後は引き續き輸出超過にして同年より今日に至るまで三十六年を通じて輸入超過を見たるは唯八八年八九年及び九三年の三年に過ぎず然も其合計四千八百萬弗に過ぎざるに、然るに輸出超過は每年莫大の額に上りたること前揭統計の指示する所の如し、斯の如きは抑も何故なりや、蓋し合衆國は國內に莫大の富源を藏すと雖も新進國のことゝて之を開發するが爲めには鐵道運河等に依りて先づ運輸交通の便を開かざる可らず、同時に各種の機械精巧製造品の如きは國內に於て自ら之を供給し得るに至るまでには一廉の歲月を經過せざる可らず、其間は主として歐洲先進

諸國より其供給を仰がざる可らざるの有樣なりしを以て一八七〇年頃に至るまでは毎年多額の輸入超過を見たるに反し輸出超過を見たるは極めて稀なりしなり、然るに一八三〇年以來初めて着手したる米國の鐵道業は七五年頃に至りて漸く大成し之れが爲めに富源の開發に資したること殆んど驚く可きものあり、卽ち合衆國は運河に依りて農作物の價格を二倍ならしめ、更らに鐵道に依りて之を三倍ならしめたりと稱せらるゝ次第にして、鐵道の四通八達と共に農產物の輸出は俄然激增するに至りたるは爭ふ可からざる事實なり、加ふるに保護政策の結果は製造工業品にして從來英國其他の歐洲諸國より輸入したりしものをも或程度まで防遏するを得たるに依り輸出入の大勢は玆に漸く一變して今や輸出超過の旺盛なる、世界敢て並ぶものなく將來に於ても殆んど何時まで繼續す可きや計り知る可からざるの有樣なり。

以上の例を以てすれば、輸出入の超過が一回轉を來さんが爲めには頗る長き歲月の經過を必要とするを知るに難からざる可し、されば特殊の事情存在して之れが爲め或は輸出超過繼續し或は輸入超過永續する場合に屑々たる人爲的小刀細工を施すと雖も到底此大勢を動し得可きものに非ざるを知らざる可らず、吾人は彼の一知半解の知識を以て經濟上の議論を試み今日我國の輸入超過を變じて輸出超過國たらしむること財政當局者の一擧手一投足に依りて容易に庶幾し得可しと信ずるが如きは確かに經濟上の迷信たるを疑はざるなり。

二

特殊原因の存在する國に於て容易に輸出入の大勢を動かし得るものに非ざるは前言せる所の如し、然るに我國も亦日露戰役後特殊狀態の下に陷るに至りたり、卽ち國債、市債及び民間の外資輸入に對し國民の每年海外に支拂はざる可らざる借金の利子は一億に上り國民の知識は增進して新需要頓に增加し、生活程度上進して精巧貨物に對する欲望も多大となり、兼て企業心勃興して製造工業の振起すると決して日露戰役前と同日の談に非ざるなり、卽ち之れが爲めには一般輸入は增加し殊に機械原料品等の輸入激增するに至りたるは決して怪むに足らざるなり、吾人は新興國に免れざる運命として必ず今後とも輸入超過の繼續す可きを信ず、否な之れ寧ろ自然の大勢にして斯く有らざれば却つて心細き次第なりと云は

ざるを得ず、何となれば戰後の此輸入超過こそは我國民が獨り軍事の方面に於てのみならず、有らゆる方面に發展したるの事實を證明するものにして知力體力の增進したる結果が需要の激增となり、企業心の勃興となりて爲めに輸入超過就中機械原料品の輸入增加となりつゝあるものに外ならざればなり、而して輸入超過の支拂資金及び一億圓内外の外債利子の決濟資金を何處に求む可きや。之れ朝野の等しく心配する所なりと雖も、吾人は之に對して決して狼狽す可きに非らずと主張するものなり。卽ち吾人は當分の間吾國は外國の投資々金を以て其決濟に當て得るの見込充分なりと信ずるものにして、今や我金融界は漸く世界的となり外國人にして我國に投資しつゝ有るもの決して少なからず、從て我國は將來務めて外國に對して吾財政の信用を失墜せざらんことを期するに於ては今後外人の我國に投資するもの益々多かる可きは疑なく、之に依りて我國は年々對外支拂の金額を入手するを得可きのみならず之を内に利用して國富の開發を計り殖産興業を振興するに於ては國民經濟の上に何等の危險なくして裨益する所極めて多かる可きを信じて疑はざるものなり、然るに世間の論者は動もすれば非常なる悲觀說を抱き或は爲替換中止を主張し、或は然らざるまでも無暗に通貨緊縮說を主張して物價を下落せしめ、以て輸出を增加せしめ之に依りて外債の利拂と輸入超過の決濟に供せざる可らずと論斷するもの少なからず、吾人は此種迂遠の說を爲すものゝ代表者として去る十一月廿八日日本經濟會に於て試みたる大隈伯の財政論を擧ぐべし、其一節に曰く

卽ち今日の物價騰貴の原因は財政の都合より來れる通貨の膨脹にして此通貨を縮少すれば物價は低落し國民の生活費を減ずるのみならず、輸出は增加して公債利拂の爲めに不都合極まる無理算段して在外正貨を置くの必要もなかる可く、若し通貨の膨脹を今日の儘に放棄するに於ては物價はます〳〵騰貴して國民中衣食に窮するものを增加し、延ては社會黨の勃興を促すのみならず、物價騰貴の爲めに益々輸入を增加して公債の利拂も不能となり國家は破産するの外途なかる可し。

我輩は大隈伯の財政論なるものが學理的批判の上に於て殆んど三文の價値もなきものたるを知らざるに非らざれども、然も伯の此意見と略ぼ同樣の考を有する

もの今日の財政論者中に少なからず、又伯の意見なればとて相當の價値あるものなる可しと誤り信ずる者も無きに非ずと思はるゝが故一言茲に彼等の迷信を指摘せんと欲するものなり。

一、物價騰貴の原因は通貨の膨脹に在りとの獨斷的結論に對しては注意深き論評家の決して一致する能はざる所なり、何となれば今日の物價騰貴は通貨膨脹以外に更により重大なる幾多の原因存在するは明白なればなり、卽ち官業の値上げ、內地諸稅の加重、保護的輸入稅の增徵等は通貨の膨脹よりも幾層倍物價騰貴の原因を爲しつゝあるのみならず、凡そ新興國には必ず物價騰貴の趨勢免る可らざるものあり、卽ち新興國民の增進したる經濟上の需要に應ずるが爲めの貨物の供給が一朝一夕にして之に伴はざるが故其需要と供給との間に權衡の亂るゝが爲め物價騰貴ともなり、輸入超過ともなるに至るは自然の勢なりと云ふ可し、吾人と雖も今日の物價騰貴の原因中には通貨の膨脹もなきに非ずと信ずるものなり、然れども此の影響は極めて瑣々たるものに過ぎず、何となれば日露戰後通貨は頗る增加したるに相異なしと雖も然も、經濟貨物も亦大に增加したるの事實は明治三十四五年に比し今日の輸出入が約二倍に增加せるに依ても之を推知するに難からず、卽ち一方に於て通貨の膨脹有りたればとて他の一面に之に比例して貨物の增加あるに於ては物價はさして騰貴するものに非らざるは經濟學の初步を了解する者の何人も敢て疑はざる所なる可し、然るに大隈伯及び世間の伯と同一議論を吐くものは單に通貨の數量の增加にのみ注意して其相對たる貨物の數量の增加に不注意なるは笑ふ可きの至りならずや、況んや通貨の膨脹以外に物價騰貴の原因頗る多きに拘らず、是等の原因を凡て放却して直ちに通貨膨脹之れ今日の物價騰貴なりと獨斷的論結を下すに於てをや。

二、通貨を縮少すれば物價は或程度まで低落す可きこと明白なり、然れども通貨收縮と共に金利は必ず騰貴す可し、金利騰貴すれば生產業者は困難に陷らざるを得ず、而して或は生產額を縮少するか但しは之を中止するの止むなきに至るや、貨物の供給は減少して物價は再び騰貴せざるを得ざる可し、故に生產業者を苦めざる程度に於て通貨を收縮する場合に於てのみ能く物價を低落せしむるを得可きのみ、故に通貨政策にのみ依賴して物價を下落せしめ得る範圍は極めて局限せら

れ居る事實を知らざる可らず、況んや今日の物價騰貴の原因は通貨以外に重大なるもの頗る多きに居るに於てをや、されば通貨の伸縮のみを以て物價左右唯一の鑰鍵なりと見做すは餘りに單純なる考と云はざる可らず、但し日本銀行が政府の不生産的事業の遂行を幇助するが爲め濫りに之が融通に應じて爲めに通貨を膨脹せしめ或は前桂内閣時代に於て四分利公債借換の資金を海外より輸入し來り或は東京電車市有の財源を外債に求めて之を内地に散布したるが如きは國内に何等の生産的事業を新たに興さしめたるに非ず、從て貨物の生産額は國内に增加したるに非ず、全然通貨膨脹の惡影響のみを止めたるものと見做さゞるを得ず、故に斯の如き無謀の擧は今後愼まざる可らざるは言を俟たざる所なり、然れども物價を下落せしめんが爲めには貨物の供給を豐富ならしむるの一事こそ根本的原因にして次で直接及び間接の諸稅を輕減するは其の効著しかる可きと同時に經濟界は之が爲め振興せらるゝ所以なれども通貨に至りては一概に論斷し去る能はざるもの有るを知らざる可らず、何となれば通貨は良く之を利用だにせば資本として一國の生産を多々益々盛ならしむ可し、反之して之を利用するの道を講せざるか但しは不生産的用途に消費し去るに於ては惡影響を齎すの外なければなり、從て前者の目的の爲め通貨を使用す可しと說くは極めて有益なり、然れども後者に消費するの恐れ有れば、とて既得のものまで之を放棄せよと云ふ理由有る可らず、今日世界の富强國たるもの孰れか通貨の善用に銳意熱心せざるもの有らんや、況んや我國の如き經濟上に企畫經營せざる可らざるもの極めて多きに於てをや。

三

「物價低落すれば輸入は減じて輸出は增進するに至る可し、斯くすれば正貨流出発換準備絕滅の恐れもなきに至る可く、外債の利子も此輸出超過に依りて決濟し得可し」とは之れ亦大隈伯を初め早計論者の臆斷なり、吾人は敢て臆斷なりと云ふ、何となれば物價下落が輸入を沮止して輸出を奬勵するは經濟學上の定理なれども、然も此定理の完全に實現せらるゝ、爲めには種々の前提を必要とすることを知らざる可らざればなり、況んや僅々の輸出入の差若くは些細の外債利拂ならんには、は之を庶幾し得ざる非ざる可しと雖も、此兩者を合したる其の總額二億圓に近き

ものを今後短日の間に我輸出超過に依りて決濟せんことは殆んど思も寄らざる所なりと云ふ可し、先づ吾人は物價下落が輸入を沮止し輸出を增進せしめんが爲めには如何なる前提を必要とするかに付て一言せんに、若しも世界各國が自由貿易の方針を取り且つ各國民の產業も、將た衣食住の方法も其消費貨物も殆んど相異なき場合には一國の物價下落せば容易に其輸出は增進して外國よりの輸入は沮止せらる可し、然るに我國の如く極東に偏在して風俗習慣總て歐米人は愚か支那人印度人等の東洋諸國民とも甚だしく相異ある國に於ては如何程下落したりとて外國には一品も輸出せられざるもの極めて多かる可し、例へば英佛獨米諸國間に於ては風俗習慣大差なく、從て日用貨物も殆んど同一なるが故、英國に於て羊毛織物の代價下落すれば獨佛に向つて盛に輸出せらる可しと雖も我國民の日用品たる和服材料の如きは何程下落するも海外諸國には輸出せられざる可く、味噌、醬油、酒、下駄、足駄、傘の如き概ね此類たるを免れざる可し、但し一般物價下落すれば輸出向貨物も從て其の價低落す可ければ其の輸出は增加するに至ること爭なかる可しと雖も、こは決して多きを期待す可きに非ず、何となれば外國が貨物を購入

するは其國に之に對する需要の存するが爲めにして價の點は寧ろ第二次に位するを以てなり、卽ち外國の需要が毫も增加したるに非ず或は却て減少しつゝある際に如何に廉價に之を提供したればとて其賣行は增加す可きに非ず、勿論代價の低落は需要の增加を促すに與つて力あるは論ずるまでもなし、然れども如何なる場合に於ても常に然りと稱する能はざるは經濟學上所謂需要彈力性に就きて少しく研究したるものゝ何人も敢て疑はざる所なる可し、要するに需要は根本の原因にして其增減に依りて賣行きの伸縮するは間違なき事實なれども、代價は斯かく根本的原因を爲すものに非ざるを知らざる可らざるなり、殊に國際競爭の激甚を極むるや一國が代價を低廉にして多く輸出せんと欲すれば欲する程相手國に在りては關稅政策に依りて其輸入を防害せんと試むること無きに非ず、一國の輸出品が原料品たる場合には斯る恐れは少なしと雖も加工品若くは精製品なる場合には保護主義の諸國に在りては本來此等貨物の輸入防遏を目的とするものなるが故に必ず關稅政策に依りて其輸入を防害せざれば止まざる可し、故に中立市場に於ては價格の低廉を利用して他國品と競爭するの便宜を得可しと雖も然ら

ざる場合に於ては價格の低落は輸出奬勵の爲めさしたる効能の伴はざるものと云ふを得可し、殊に此價格の低落たるや機械の發明其他生産技術の上に於ける革新的事實に原くに於ては他の方面に於て何等惡影響を及す事なしと雖も通貨收縮の結果茲に至りたるものとする時は、金利の騰貴は必然免る可らずして爲めに輸出向工業家の苦痛を感ずること少なからず、或は其生産額を縮少し若くは之を中止するの結果は輸出總額の上に於て却て減少せざることを保す可らざるなり、されば原則として生産費の減少を期し以て今日輸出向生産として間に合はざる産業をも相當の利益を以て經營するを得せしむ可しとの論甚だ可なれども其所謂生産費の減少を期するの途に關しては充分注意する所なかる可らざるや論を俟たず、吾輩は此方法として或は通貨の收縮を叫び若くは勞銀の低下を云々するが如き說に對しては決して無條件に賛成するを得ざるなり。

通貨の收縮と同じく賃銀の低落も亦生産費を減少するものなるが故に輸出貿易を助長する上に於て與て力あるは論ずるまでも無き所なり、然れども如何なる時代に於ても勞銀の高低と輸出の大小を秤に掛けて前者を犧牲にしてまで後者

を增進せしめざる可らずと云ふもの有らば吾人は又之に反對せざるを得ざるなり、勿論ノミナル、ウエーヂが低下しても レアル、ウエーヂの低落せざる場合に於ては之れが爲めに輸出增進するに至らば夫れだけ國家に取りて喜ぶ可し、然れども ノミナル、ウエーヂと共にレアル、ウエーヂも亦低落して之と共に輸出貿易が增進したりと雖も決して喜ぶ可きに非らざるなり、否我輩は斯の如き場合には寧ろ輸出貿易を犧牲に供するも勞銀の騰貴せんことを望まざるを得ず、何となれば國富の增加は輸出貿易以外に之を企圖するの途決して少なからざるが故如何なる犧牲を提供しても其增加を計らざる可らざる理由是れなしと雖も、勞銀に至りては國民大多數が之に依りて其衣食の道を立て妻子眷族を養ふ唯一の泉源にして、勞銀增加すれば啻に現在の下層社會が一般に其生活を容易ならしむるを得るのみならず、彼等の子孫の養育に資して爲めに將來の多數國民をも幸福ならしむる可しと雖も、勞銀にして低落せんか、之と正反對の結果を生ぜざるを得ざればなり、されば輸出の奬勵は元より可なり、然れども一般産業界に擾亂を誘起せしめ、或は國民の企業心を萎靡不振ならしめ、或は一般勞銀を低落せしめてまで輸出の奬勵に

熱中せざる可らざる理由は斷じて有る可らず、今や我國民は外債の利拂と引續きての輸入超過の爲めに聊か周章狼狽したるの傾あり、卽ち此輸入超過と外債の利拂を決濟せんが爲めには唯一圖に輸出の增進を企畫し將來の此輸出超過に依りて相殺するの外なしと信じ、偖てこそ口に經濟財政を論ずるもの苟くも輸出奬勵を云々せざるはなく、其結果殆んど手段の如何を問はざるの有樣なりと雖も、然も何程焦心憂慮したればとて短日月の間に輸出は激增して輸入は減少す可きものに非ず、彼の英米諸國に於て輸出入の大勢が一變するまでには半世紀の歲月を必要としたる前述の例に依りて之を見るも當分の間我國は一億乃至二億に近き輸出超過を實現して之に依りて外債利拂其他に充當するの到底不可能なるは之を想像するに難からずと云ふ可し。

否我輩の考に依れば我國は將來永く輸入超過國として進まんも知る可らず、我國は合衆國、アルゼンチン等と異りて國內に天與の富源を有すること比較的に少なく、又十九世紀の前半時代に於ける英國の如くに機械の利用世界に冠絕し、製造工業に於て獨專的地位を占めたるに非ず、鐵石炭の供給も大に豐富なりと云ふに非らず、然も國內の人口は比較的夥多にして且つ彼等の需要は人文の發達と共に日に月に增加改善せらるゝの有樣なるを以て國內の產物のみを以てしては到底之を滿足せしむる能はざるは明白なり、從て食料品を初め贅澤品に至るまで歐米諸國若くは東洋諸國より之を輸入せざるを得ず、爲めに我國は自然的に輸入超過國たる素質を有するものと云ふも敢て不可なかる可し、然れども自然的輸入超過國なればとて之亦敢て憂ふるにも當らざる可し、何となれば世界各國を見渡すに我國と同種類に屬する邦國は決して少しとせざればなり、例へば獨逸伊太利の如きは卽ち之にして此兩國は例年多大の輸入超過を繰返しつゝ有れども經濟上決して破產するに至る可しとも思はれず、否却て其國民經濟上の發達は年と共に顯著なるもの有り、國民の生活程度も亦追年向上改良せられつゝ有るは爭ふの餘地なき所なり、果して然らば輸出入の不權衡は決して國民安危の因て懸る根本的問題に非らざるは推知するに難からざるなり。

四

輸出入の不權衡は國民經濟の安危の懸る所に非らずとすれば、更らに根本の點

は何處に存するやと云ふに國民經濟の權衡たるや言を俟たず、卽ち貿易の差額以外に國際間貸借の關係を生ず可きものに運賃あり、保險料あり、手數料あり、將た移民の送金、漫遊外人の消費金あり、海外投資の利子ある等皆世人の熟知する所なり、今是等の貿易以外に我國民經濟の利得に歸す可き重なる泉源として其筋の調査に係るもの大略左の如し。

移民送金及海外事業利益金	四五、〇〇〇、〇〇〇円
外來客消費金	三五、〇〇〇、〇〇〇
運賃及保險料	二六、〇〇〇、〇〇〇
外人放資金額	一〇、〇〇〇、〇〇〇

卽ち合計一億二千萬圓內外の債權我國に在るは明かなり、從て在外國債、市債、及び民間の輸入外資に對する利拂を決濟して尙餘裕あり、以て一部輸入超過の決濟にも供し得るの事實を知るに足る可し、然れども、一昨年度及び昨年度に於けるが如く毎年巨額の輸入超過を繰返すに於ては如何としても國民經濟の權衡を維持する能はざるは明白なる次第なれば何等かの方法に依りて更に此の不權衡を回復

すること必要なる可し、而して之れが爲めには適當なる方法に依る輸出の奬勵固より結構なれども、然も吾人は更らに簡單にして且つ有効なる手段の存するとを認むるものなり、卽ち第一には政府が毎年海外に注文する軍艦、兵器、其他の政府事業に使用する機械材料等は努めて之を國內に於て辨ずるの方針を取る可きことにして此方針に依れば我國は年々必ず數千萬圓に達する正貨の流出を防遏するを得る次第なり。殊に彼の軍艦の如きは戰艦一隻を海外に注文すれば一朝にして二三千萬圓を喪失せざる可らず、此窮乏せる國民經濟に取りては實に容易ならざる犧牲たるや疑を容れざる所なり、されば彼の海陸軍の如き不生產事業に對しては吾人は出來得る限り消極政策を取るを可なりと信ずる次第なれども、然も萬止むを得ざる場合には之を內地の供給に俟つ可しと爲すものなり、殊に機械其他の物品なる場合には之が爲め我國の製造業を奬勵すること決して少なからざる可く、縱令最初の間は歐米諸國より輸入するに比し高價に就くと有る可く或は初めより非常なる精巧品を國內に得ること困難なるやも計られざるも、然も久しからずして內地工業が之に習熟するに至る可きは多く疑を容れざる所、從て一度其

供給を國内に仰ぎ得るに至らんか、更らに進んで海外輸出の途も自然に開け來る可きや必せり、斯の如くにして政府注文の輸入品を抑制するの方針に出でんか、年々數千萬圓の輸入を防遏し、夫れだけ國民經濟の鞏固を加ふるに至る可し、加ふるに我移民は今日北米諸國に於ては至る所排斥を蒙りつゝ有りと雖も、然も南米に至れば大に我移民を歡迎しつゝあるもの決して少なからず、卽ちブラジル、智利、秘露等是れにして今後是等の地方に向ひ我移民は大に發展し得るは疑を容れざる所なれば政府の指導にして其宜敷きを得んか、此等移民の送金は將來ますゝ〳〵增加するの見込充分なる可く、更らに漫遊外人も内外往來交通の便加はり内地に於ける彼等待遇の途備はると共に益々增加するに至る可きは疑なく、從て其消費金も自然少なからざる額に達す可きや明かなり、卽ち我國は彼の伊太利と同じく貿易上の不權衡は主として是等外人の消費金と移民の送金とに依りて或程度まで回復するを得可きや必せり、然れども今日の現在に於ては移民の送金と外人の消費金と果ては政府の外國注文見合せ等の各項を合計するも尙以て貿易上の差額を決濟して國民經濟の權衡を維持するに由なきは數字上明白なる所なり、然も一方には如何なる輸入奬勵の策を講ずるも短年月の間に無暗に激增す可きものに非ざるは上述せる所の如く兼て輸入物品が食料品若くは原料品等其大部分を占むるものなる以上は漫りに關稅政策に依りて高稅を賦課して其輸入を防遏す可きものに非らざるが故殘る所は唯當分の間外人の内地投資を歡迎し之に依りて外債利拂貿易の差額の決濟に供し兼て兌換の基礎を維持するの一策あるのみなりと云はざる可らず、世間或は所謂外科療治と稱し正貨剛絶兌換中止を斷行して之に依りて貿易の關係を一變せしむ可しとの議論を爲すもの有れども、斯の如きは吾人の斷じて反對せざるを得ざる所なり、何となれば如何に通貨收縮したればとて内に貨物の生産增加せず、外に之に對する需要加はらずして漫りに輸出の增加す可き理由なきのみならず、斯る急激なる手段を取るの結果は徒らに經濟界を攪亂し、破産續出し、内外の信用を粉碎し、一般經濟界に容易に回復す可らざる損害と痛擊とを與ふるの外殆んど得る所無かる可きを信ずればなり、卽ち今日の我國民經濟には斯の如き漢法醫的療法の施行す可らざるは多言を要せざる所にして、他に適當なる手段を見出さゞる可らざるなり、其手段たるや外人の投資に依賴す

るの外なきは前述の如くにして此點に關しては今や我邦人中にも漸く之を感得するに至りるもの無きに非らざるが如し、例へば松方侯の財政意見の如き其一例なれども、然も侯は徒らに投資なる言葉に捕へられて遂に不思議の結論に到達したるは遺憾なりと云ふ可し、卽ち侯は外人が直接に我民間事業に對し投資するとのみを歡迎して我國が經濟的政府事業例へば鐵道の布設改良等の目的の爲め外債を起すを絕對に排斥したるは何故ぞや、既に外人の投資を以て今日の我國に取りて喜ぶ可き否必要缺く可らざることゝまで認めたる以上は、苟くも經濟的投資にして之が爲め我殖產興業の上に裨益少なからざる事業に對するものなる以上は敢て其民間事業に對するものなると政府の生產事業たるとを問ふの必要毫も有る可らず、否我輩は直接民業に對し外人が投資し來るよりも政府の信用を以て發行する生產的外債の方遙かに有利なる條件を以て外資を輸入し得ることを信じて疑はざるものなり、勿論彼の前桂內閣時代に於けるが如く殆んど盲目的に外債を發行して其資金が國內に如何なる働を爲しつゝありやに頓着せるざが如き愚舉を繰返すに於ては外資輸入は害有りて益なきこと論を俟たざる次第なれども、苟くも眞實國內の生產事業振興の基礎たる可き鐵道事業但しは拓殖事業等の爲めに新に外債を起すは何等の故障ある可らず、同時に外人が直接民間の事業に對し投資せんとするもの有らば吾人は多々益々之を歡迎す可きのみ。

此間接直接の外人の投資に依りて我國は今後一定期の間外資の利拂、輸入超過の決濟に充當し、以て國民經濟の不權衡を調整し、之に依りて正貨準備を維持し以て兌換の基礎を安固ならしむるを得可し、同時に此外資を內に利用して殖產興業の振興を企圖するに於ては我國民經濟は年一年順境に向つて進步す可く今日の輸出入總計拾億圓に過ぎざるものの約十年にして今日の二倍に達するに至る可きは吾人の信じて疑はざる所なり、合衆國が其輸入超過時代に處したるの途は只歐洲の資本を利用したるの一事に過ぎず、而して其資本を利用して國內富源の開發に銳意するや一八七〇年代に至りて初めて羽翼成り根幹玆に發達して爾來俄然として輸出超過時代に移りたるの事實は前述せる所の如し、吾國は富源の豐富なる點に於て到底合衆國と同日の論に非らざるが故內地の開發國力の增加も合衆國と同一割合を以て目覺ましき發達を爲さんこと思も寄らざる所なりと雖も、外

資に依賴して國富開發の手段を講せざる可らざるの點及び輸入超過を繼續しつゝ尙ほ將來可なりに長き期間に渡りて國民經濟の權衡を維持するの途を講せざる可らざるは半世紀以前の米國の狀態に酷似せるもの少からず、現に鐵道事業の如き農工商を初め森林業漁業礦業等の發達に必要缺く可らざる根蔕たるに係らず、今日僅に五千餘哩の延長を見たるに過ぎず、卽ち我北海道を除きたる本國の面積に過ぎざる伊太利に比し僅か二分の一の鐵道延長を有するに過ぎざる次第にしてては以て我國民經濟發達の基礎尙ほ甚だ不充分なるの一證と見做すを得可し、此他港灣と云はず、電氣事業と云はず、殖產興業の根蔕的事業にして施設經營す可きもの少なからず、況んや製造工業の一般に於てをや、而して此等事業の着手進捗の爲めには外人の投資を歡迎せざるを得可からず、況んや之に依りて我兌換の基礎を維持せざる可らざるに於てをや、吾人は前桂內閣の盲目的外資輸入の弊害を見て爲めに神經過敏に陷りたる我國民は餘りに小膽なりと評せざるを得ざるなり。

アダム・スミスの價値論に就いて

河上肇

アダム・スミスの價値論は氏の大著『國富論』第一編第五章に述べてあるが、之は『國富論』中有名なる難解の一章である。嘗てホーナー (Horner) と云へる人は、之に就いて左の如く放言したと云ふ。

『國富論』第五章の議論は、六かしくて、分らんで、混亂して居て、何とも手の附けやうが無い。其の爲め吾々は、之が閱讀を中止せざるを得なかつた。…余は到底スミスを理解し得ぬことを發見すると同時に、忽にしてスミス自身が果して自らを理解し居たるやを疑ふに至つた。

We have been under the necessity of suspending our progress in the perusal of the Wealth of Nations, on account of the insurmountable difficulties, obscurity, and embarrassement, in which the reasoning of the fifth chapter are involved.....the discovery that I did not understand Smith, speedily led me to doubt whether Smith understood himself. (Memories and Correspondence of Horner, vol. I. p. 163. — Mecleod, The History of Economics, 1896 p. 92. 引ヲ所。)